

# 内蒙古自治区出土の邢国青銅器

- 中国北方地域の民族と中原との交流 -

豊田 久

## “ 邢国 ” Bronze Casting Found in the Inner Mongolian Autonomous Region Contact between the People in Northern China and “ 中原 ”

TOYOTA Hisashi

キーワード：邢国，中原青銅器，中国北方民族

Key Words: *Hsing-kuo* 邢国, *Chung-yüan* 中原 broze casting, the people in northern China

### はじめに

中国北辺の砂漠アジアに属する内蒙古自治区の東の端，大興安嶺につながる北方草原において，中原で作られた青銅の彝器が北方民族の器と共に出土した。その器に鑄込んであった銘文から，この青銅の容器が殷周革命の時に活躍した，有名な周公の胤が封建されたと云われる邢国の青銅器であることが分かる。そこで，この南の黄河流域地方，洛陽を中心とする中原地区の青銅器が，なぜ遠く中国最北辺の草原において出土したのか，東アジア地域における北方民族と南の黄河流域，中原地区との交流について少しく考えてみたい。

— ,

1974年，内蒙古自治区の哲理木盟，扎魯特旗巴雅爾吐胡碩において牧民が放牧中に窖蔵された青銅器一器（図，1，図，2），一簠を発見した。それは，水土の流出によって地面が流されたため現れたものであったと云う。具体的出土地点は，約北緯四十五度，東経百二十度の大罕山の北麓，霍林河（或は作呼林河）の上流域であって，霍林郭勒市の西南，約十六キロの地点である。それは，中国の最北辺で出土した周代における黄河の中原青銅器と考えられている。<sup>(1)</sup>その後，更に当地の再調査によって，同時に出土した銅器は銅鍑一件，薄片式連珠形青銅飾二件などが追加して報告されており，これらは東胡説，山戎説などがある，北方少数民族の特有のものと考えられている。<sup>(2)</sup>

その場所の状況については，報告書によると扎魯特旗北部，霍林河炭坑沙爾呼熱採区の南五キロ，小山の西南斜面である。その窖蔵地点に近く，小山の南には二十から四十メートル幅の水溝があり，

山の西側から西北に向けてこの霍林河に流れ込んでいる。この沙爾呼熱一帯は、低山の丘陵地帯であり、西側は錫林郭勒草原に接し、東側は大興安嶺山脈に連なり、そこは内蒙古高原における東縁にあたる。その大興安嶺山脈の更に東の方は吉林省、遼寧省らの中国東北部につながっている。<sup>(3)</sup> そのような場所にあたる。

この内蒙古高原の東縁にあたる、窖蔵された青銅器の出土したこの一帯の低山丘陵草原は、地域が広くて緩やかな平地であり、土質が肥沃で水草が豊かな地域であると云われている。よって、牧民にとって家畜や人に最適な天然の優良な牧場であるという。<sup>(4)</sup> このような場所から、遠く南の黄河の流域、洛陽を中心とする中原地域で作られたと云われる青銅器が出土したのである。

この中国最北辺で出土した青銅器の𡗗の内底(図、2)には、縦長に、五字づつ三行、十七字、重文二の銘文があった。その銘文からそれが中原に鹿を逐うと云う、殷周革命の時に、有名な武王の弟・周公旦の胤が封建された邢国の青銅器であると云われている。<sup>(5)</sup> 一般にこの青銅器は、その銘文にある、いわゆる作器者の名を取って大宰已𡗗や井姜大宰已𡗗などと呼ばれている。<sup>(6)</sup> そこで、古くからあった、北方地域と洛陽とを結ぶ遼西通路らを通じた北方民族と南の黄河の流域地方との交流を、この大宰已𡗗から考えてみたい。なお、この青銅器は現在、内蒙古自治区通遼市の哲理木盟博物館に所蔵されている。<sup>(7)</sup>



(図、1)



(図、2)

内蒙古高原出土の青銅彝器

## 二、

この大宰已𡗗の大きさは、通高が13cm(14cm)、口径が19.4cm(19.8cm)、足径が19.4cm、耳長が12.7cm、両耳間の最大の長さが36.8cm、である。そして、器腹に対照して二つの獣首形の耳が有り、耳の下に垂珥が有る。紋様は器腹の上部に一周して八組の窃曲紋があり、その下に五つの帯状の瓦紋がある。また圈足は鱗紋を飾り、そこに三個の突起した獣首がある。この獣首の下に三個の短足がもともと有ったが、今は無く、その断痕が残っていると云う。<sup>(8)</sup> この三個の短足の配置は、写真(図、1、図、2)を見ると、内底における銘文の方向からして、二つの獣首形の耳の中間にその内の一つが来て、あとの二つは等間隔に耳の近くに配置されていたように思われる。そして、この器の蓋は、後に述べる、早く1963年に同じ内蒙古自治区の遼寧省との境にある、西周晩期から春秋早期のものとされる寧城南山根の墓から出土した、これと類似した同型の𡗗(図、8)などからしても(また、𡗗の通例からしても)、もともと有ったが、既に失われたものであろう。

つぎに、この器の銘文拓本を整理してみると、1980年刊の李殿福「已毀初釈」(『社会科学戦線』1980年、第3期)に載せる拓を拓(A)(図、3)とする。また、1982年刊の張柏忠「霍林河鉅区附近発現的西周銅器」(内蒙古文物考古1982年第2期)に載せる拓を拓(B)(図、4)とする。また、1986年刊の上海博物館商周青銅器銘文選編写組『商周青銅器銘文選』(後に、銘文選と略称)に載せる拓を拓(C)(図、5)とする。また、1987年刊の中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成』(後に、金文集成と略称)に載せる拓を拓(D)(図、6)とする。<sup>(9)</sup>これらの拓を見ると、一行目、一番下の字「已」の字の出具合からして、どちらかといえば、拓(A)と拓(D)が鑄を充分落とす前の原拓に近いように思われる。拓(C)は、平板な感じを与えている。

この文字を見ると、一行目、四字目の「宰」は、「辛」の下の一画がないのは珍しい。また、二行目、四字目の「毀」の右側「殳」の字の右上横に一画出ているのは、容庚編『金文篇』(1985年、初版1925年)でこの字を見ると、<sup>(10)</sup>幾つかの例があげてあるが、他器にも見えるものである。そこにあげる同じ結体の字が見られる師夷父毀、伯嘉父毀、卓林父毀、魯遼父毀、魯伯大父作季姫毀らの作器時代を今仮に金文集成で見てみると、それぞれ師夷父毀、伯嘉父毀は西周晩期とし、また卓林父毀、魯遼父毀、魯伯大父作季姫毀は春秋早期などと解されている。<sup>(11)</sup>作器時代と関係して、この少数の結体をもった字の意味することを考えてみる必要がある。また、三行目、上から二字目の「永」の字の左下部分が通例の金文の「永」の字と少しく異なっており、後述する、スペーサーの部分の間違えて鑄を落とすときに彫ったのかもしれない。



(図、3)



(図、4)



(図、5)



(図、6)

### 三、

つぎに、この器のスペーサーを見てみると、(図、2)の器の内底における銘文の見える写真や拓(C)、拓(D)によく見えている。その配置は、下の(図、7)(文字の間、両側の白色の部分)の如くである。白色部分の配置から分かるように、文字の間と両側に置かれているのが分かる。張氏はこれについて、この器の内壁に「斑塊」即ちスペーサーが五六個あり、底部には比較的密集していると云う。<sup>(12)</sup>これは、内范の底部に文字を凸文で入れた部分が肉厚が薄くなり、外范とくっ

きやすくなるので肉厚を保つため、文字の部分にはスペーサーが多く配置されているためである。それを張氏は密集していると言う。簠の方は、「斑块」が一五個見られると言う。更に張氏はこれについて、少し長い引用すると「這兩件銅器因為已被磨孤光使用，故器壁上的斑块十分清楚。兩件銅器銅質均為黃色，唯斑块呈紫紅色，其大者直径約十余毫米，小者僅二、三毫米左右。据觀察，此斑块為溶于器壁的金属小块，其含銅量高于器壁的含銅量，因溶点較高澆鑄時未被溶化，故顯紫紅色。斑块多与器壁平行放置，個別傾斜，使器表呈現疤痕，亦有紫些内外壁露頭或压被花紋的現象。這些現象正反映了青銅器的鑄造工藝。有人提出此類斑块是鑄器時，為使内外范之間保持均勻，而在内外范之間加的“墊隔物”。根据我們的觀察，此兩件銅器，簠之斑块分布較有規律，而斝之斑块規律不強。用高溶点銅块做墊隔物不致因銅液注入后溶化而影響墊隔效果。斝之底部斑块比較密集，當是因底部鑄銘，使鑄造難度增大，為防止出現字口鏤空現象，而把斑块加密。从斝之外壁觀察，外范由四块圍范和一块底范合成，斝底部尚有底范留下的斜方格紋痕迹。」などと述べている。<sup>(13)</sup>即ち、張氏の云う「斑块分布」つまりスペーサーの配置は、同出の簠は規則正しく、この斝はそれほど正しくないと云っている。確かに、写真や、この銘文拓本に見える配置は、とくに規則正しくはなかった。また「外范由四块圍范和一块底范合成，斝底部尚有底范留下的斜方格紋痕迹。」などと述べ、この器が外范分割法、合范法で作られていることを述べている。これらの、当時の殷周青銅器の鑄造方法や溶銅を流すための空間を維持するスペーサーの配置からして、この器が偽器ではなく、真器、真銘の器である証拠となる。



(図、7)  
銘文部分のスペーサー  
の位置(白色部分)

#### 四、

つぎに、この器の内底にある銘文の内容について見ると

井姜大宰已鑄其實斝，子子孫孫永實用享。

とあり、「邢姜大宰已がその實斝を鑄る，子子孫孫永く實として用い享せよ」とある。「井」の字は諸氏皆「邢」に釈している。<sup>(14)</sup>

この「邢姜大宰已」とは、「邢姜」は邢侯の嫡妻であり、彼女は姜姓の女性である。後述するように、邢侯自身は周王朝と同じ姬姓である。姜族は周王室と多く姻戚関係にあり、その族長の太公望が封じられた国が、山東省の斉国である。のちに、春秋時代の初めに、邢国が北方民族の侵入によって国を一時滅ぼされた時、この斉国の助けを受けることとなる。張氏は、この姜姓女子が斉国人である可能性を云っている。<sup>(15)</sup>「大宰」は「大」の字がついているが、邢侯家の嫡妻姜氏の家宰、内宰であろう。いわば邢侯の出自するその侯家、その家室の命令を伝える、侯家を管轄する家老職であろう。銘文選に「邢侯夫人之大宰，此宰是内宰，云太宰是内宰之長。周礼・天官・内宰：「内宰掌書版圖之灋，以治王内之政令，均其稍食，分其人民以居之，以陰礼教六官，以陰礼教九嬪，以婦職之灋教九御，使各有属。」と解している。<sup>(16)</sup>また、銘文選が夷王時代の作とする蔡駁銘（金文集成，四三四〇A）の王の命書中に「令汝作宰，司王家，……出入姜氏命」とあり、周の王家を司ることが、王の嫡妻姜氏（姜姓の王后）の命を司ることを意味していた。邢侯自身の出自する侯



家を構成する夫婦関係から、「邢姜」と云う女性の太宰と云う表現は興味あるところであるが、この場合も、太宰已は邢の家室を司り、嫡妻姜氏の命を司ったのであろう。<sup>(17)</sup>これについては、家計をはじめとする家の財布のひもを女性が握っており、その太宰がその命令を受けて管理することなどが考えられるかもしれない。張氏はこの「宰」の語が西周金文中に習見するが、「太宰」の語は見えず、「太宰」の見えるものは春秋器として、この器を西周晩期から早期春秋の河北邢国における銅器で、春秋早期の可能性が大きいとしている。<sup>(18)</sup>ただ、張亞初編『殷周金文集成引得』（2001年）や金文集成で「太宰」の例を見ると、この器を除いた九例の内、二例の河南南陽出土の仲甬父𡗗（同出の器と蓋二セットに、それぞれ同じ銘文がありそこに皆「太宰」の語がある）のみは西周晩期としている。<sup>(19)</sup>この器は、この太宰已𡗗と器形、紋様がよく似ているが、李学勤氏は、この器を作ったと書かれている申国の仲甬父を、西周晩期、宣王の従兄弟の輩行と解して、この「太宰」を申国の相とし、そこにこの邢姜太宰已𡗗を引いて、その「邢姜太宰」は邢の内宰としている。この書き方から見ると同時期の器と見ているようであるが、崔慶明氏は仲甬父𡗗を西周晩期から東周早期の器と解している。後に述べるように、この太宰已𡗗もこの時期における作器と考える研究者が多いようである。<sup>(20)</sup>

この器の「邢姜太宰已」の「已」は太宰の名前である。この銘文からすると、この器は「太宰已」の家廟を祭る器として作られている。彼の家廟に置かれていたものであろう。

この邢国の歴史を見ると、西周初に作られた有名な邢侯の関連器が幾つか出土している。それを見る前に、邢国の起こりについてよく引用されるのが、『春秋左氏伝』である。それを見てみると、僖公二十四年の条に、襄王が王命に従わない鄭国を、当時中原に侵入した狄に伐たせようとした時、富辰が諫めて

凡、蔣、邢、茅、胙、祭、周公之胤也

とあり、杜注に「胤、嗣也」とある。また、襄公十二年の条に諸侯の喪について述べて、「為邢，凡、蔣，茅，胙，祭臨於周公之廟。」とある。楊伯峻の『春秋左伝注』（後、左伝注と略称）の隠公四年の条に、この邢国について、「邢，国名，姬姓。通志氏族略上云，「周公之第四子受封於邢。」伝世有邢侯彝，彝為周天子册命邢侯時所作，銘末曰「作周公彝」，足證其為周公之胤，故僖公二十四年伝云々。金文常見「井侯」，「井伯」，劉節古史考存古邢国考謂井即邢。今河北省邢台市境有襄国故城，即古邢国。太平寰宇記卷五十九邢州龍岡縣引北史，謂齊武平初掘古墓，得銅鼎，有銘邢侯夫人姜氏墓，足證邢在今邢台。」と解している。<sup>(21)</sup>

邢国の起こりは、殷周革命を行った武王の弟・周公の嗣、或いはその第四子の封などと解されている。僖公二十四年、隠公五年の会箋には「此周公之子凡八人也。蓋禽父以元子受魯公。而次子世為周公。其餘如凡如祭如胙如茅。皆封畿内。邢蔣則封于外。」<sup>(22)</sup>「邢国侯爵。周公第四子靖淵所封。」などとあり、また劉文淇の『春秋左氏伝旧注疏証』の僖公二十四年の条に「旧注，周公胤六国」などと解してある。<sup>(22)</sup>その場所は、先の楊氏や後に述べる西周青銅器を考釈した郭沫若や陳夢家らは同じで、楊氏の云う「今河北省邢台市境有襄国故城，即古邢国。」であるとして、それは南北を結ぶ通路上にあたる、今の河北省邢台市の近郊と云う。1987年に、河北省元氏縣西張村の西周時代に亘る遺物中、西周墓から出土した臣諫𡗗（金文集成，四二三七）は、後に云う有名な周初の作器の周公𡗗と器形、紋様が同じで同時代の作と考えられ、その銘文に邢侯が戎を伐ったことが記されていた。よって、周初に封じられた邢国は、やはり元氏以南の邢台だと考えられている。<sup>(23)</sup>この邢台と云う地名自身が邢のそれを示しているように思われる。

この邢国関係の青銅器として、西周初の作器として知られる有名なものとして麦関係四器、即ち

麦尊(金文集成, 六〇一五), 麦彝(金文集成, 九八九三), 麦盃(金文集成, 九四五―), 麦鼎(金文集成, 二七〇六)がある。この内の三器は、初めに著録された『西清古鑑』(1751年成)では、邢侯尊, 邢侯方彝, 邢侯盃とあって邢侯の名で呼ばれている。<sup>(24)</sup>これらの四器は共に西周初の作器と考えられているが、その銘文には共通して邢侯とその臣下の作冊麦との関係が述べられている。松丸道雄氏はこの四器らを詳しく考釈しており、周公が周初に成周つまり洛陽を創建して以来、その工房で周公毀(井侯毀, 焚毀, 邢侯彝に同じ)らが作られ、洛陽の周公とこの井(邢)侯との強い結びつきから、井(邢)侯側が作銘して、麦尊, 麦彝は同じ洛陽の工房に依頼され、麦盃, 麦鼎は井(邢)侯の工房で作られたのではないかとしている。<sup>(25)</sup>その麦尊銘には、邢侯と臣下の作冊麦との関係を述べる前文に大事紀年の形式で、王が邢侯を封建した時における王の冊命を記して、

王命辟井侯, 出𡵓, 侯于邢。……

とあり、「王は辟たる邢侯に命じて、「𡵓を出て、邢に侯たれよ」と。」とある。

即ち、周初のある時に、王によって邢侯が初めて邢の地に封建されたことを述べ、以下の邢侯自身と作冊麦との関係に及んでいる。邢侯は、ここに「出𡵓」とあるように「𡵓」の地から「邢」の地への移封であったと思われる。このような例は、同じ周初の作器である、宜侯<sup>ス</sup>毀銘(金文集成, 四三二〇)にも見えている。<sup>(26)</sup>この「𡵓」の地については、郭沫若の『両周金文辞大系考釈』(後に、両周と略称)に麦尊銘のこの字について噩侯鼎銘の類似の字を挙げて、「王国維謂彼鼎之𡵓即大伾。余意當即令河南汜水縣西北里虚之大伾山, 与濬縣東南二十里同名之山有別。」とあって、その地を黃河流域の汜水縣の大伾とする。<sup>(27)</sup>また、邢侯の名が見え、しかも先の楊氏らもあげる「作周公彝」即ち周公を祭る彝器を作ったことを云う、大変有名な、洛陽出土と云われる周初の作器の周公毀銘(金文集成, 四二四一)において、その銘文にある邢侯について、両周(両周は周公毀とする)に先の左伝僖公二十四年の条にある邢が周公の胤との記事をあげて、邢侯の封地を「今河北邢臺縣西南襄国故城, 即其地。」とし、陳夢家『西周銅器断代』(陳氏は井侯毀とする)に「井侯之井即左伝僖二十四周公之胤之邢, 説文“邢, 周公子所封, 地近河内怀”; 衛世家“而迎桓公弟于邢而立之”。邢地有二: 一, 漢書地理志趙国下“襄国, 故邢国”, 今邢台縣; 二, 漢書地理志河内群平皐下注应劭曰“邢侯自襄国徙此”, 左伝宣六“赤狄伐晋国怀及邢邱”, 今温縣附近。漢書古今人表邢侯, 周公子。本器的井侯当井侯延, 詳下。」などとあった。<sup>(28)</sup>邢国は先の麦尊銘らにあるように、その地を周初に周公が経営を行ったとされる成周洛陽を中心として、移動したようである。また、その分枝が多くあったであろう。そのこと自体中国史の上で興味ある問題であるが、春秋時代に入って、後に述べる、北方民族の侵入によって、邢国が国を滅ぼされた時に、その邢国の場所が先の楊氏や郭氏、陳氏や陳槃の『春秋大事表列国爵姓及存滅表譌異』、先の河北省元市縣西張村における西周時代に亘る遺物中の臣諫毀銘の出土などから、南北を結ぶ通路上に位置する河北省の邢台とすることはほぼ一致している。<sup>(29)</sup>松丸氏は、周初、洛陽成周に従った周公とその一族の内、その子邢侯が、洛陽成周を中継点として、更に河北方面に移封されたが、王朝の衰退と共に、この邢台方面に留まり得なかったであろうと推測している。<sup>(30)</sup>

この河北省邢台と、邢国の「邢姜大宰巳毀」らの出土した、内蒙古の中国最北辺における北方草原の窖蔵地点との直線距離は約九百八十キロある。

## 五、

そこで、つぎにこの器の邢国流出について考えてみたい。これについて、李氏は当時北方の戎、

狄は常に南を犯し、邢国は西周時代における北方戎人の侵入を防ぐ屏蔽としての役割があったとして、左伝の記事をあげる。邢国の封建はその位置が南北の折衝地点にあったと思われる、李氏の云うように、北方民族との互市のほか、そのような意味が主にあったのであろう。張氏も左伝らの記事あげ、また中原青銅器と北方民族の青銅器が共出した先例として、先の発掘報告のある、やはり内蒙古自治区の東の端、遼寧省との境の寧城南山根101号墓の例をあげて怪しむに足らずと云っている。<sup>(31)</sup>この西周晩期から春秋早期の年代に作られたとされる石槨墓からはこの「邢姜大宰已毀」と類似した器が出土していることは、後に述べる。

この『春秋左氏伝』の記事に、春秋時代の初め莊公三十二年の経に、初めて

狄人伐邢。

とある。伝にはないが、会箋に「此狄入伐之始。」とある。狄人が南北折衝路上に位置する邢国を本格的に攻伐したのであろう。左伝注に邢は「邢，姬姓国，周公之子所封，今河北省邢台市西南有襄国故城，即其地。」とある。<sup>(32)</sup>つぎの閔公元年の経に

齊人救邢。

とあり、伝には

狄人伐邢。管敬仲言於齊侯曰，戎狄豺狼，不可厭也，諸夏親暱，不可棄也。宴安酖毒，不可懷也。詩云，豈不懷歸，畏此簡書。簡書，同惡相恤之謂也。請救邢以從簡書。齊人救邢。

とある。左伝注に「狄，赤狄」とあり、顧棟高大事表、梁履繩補釈を引いている。会箋には顧棟高を引いて「春秋之世。有赤狄白狄。又有長狄。閔僖之世狄尤横，其時止稱狄，未有赤白之號。蓋當時之單以狄拳者，皆赤狄也。赤狄最強，合諸部為一，力大勢盛。故能以兵威伐邢入衛滅溫伐周。又能杖義執言，救齊伐衛。齊晉之強，莫之能抗也。其疆域自晉蒲屈以東，東與齊魯衛為界。蓋自平陽潞安，以及山東之境，雜居山谷，縣地千里。故當日邢衛宋魯齊鄭諸国，胥被其患。」などと述べている。<sup>(33)</sup>この当時の、南下する狄らの中原地域に対する侵攻、強盛が知られる。つぎに、閔公二年の経に

十有二月，狄入衛

とある。伝には

冬十有二月，狄人入衛。……狄人戰于熒澤，師敗績，遂滅衛。……狄入衛，遂從之，又敗諸河。

……僖之元年，齊桓公遷邢于夷儀。二年封衛于楚丘。邢遷如歸，衛国忘亡，……

とあり、左伝注に「狄師追逐衛人也」「衛，狄相戰，終始在黄河之北。」とある。この齊桓によって邢が遷した夷儀については、左伝注に沈欽韓地名補注らを引いて「當在今山東省聊城縣西十二里。」とある。<sup>(34)</sup>また、「呂氏春秋簡選篇……中山亡邢，狄人滅衛。」を引いている。一時、邢国は亡び、混乱の中で国を移すことになる。そして、つぎの僖公元年の経に

齊師，宋師，曹師次于聶北，救邢。夏五月，邢遷于夷儀。齊師，宋師，曹師城邢。

とある。伝には

諸侯救邢。邢人潰，出奔師。師遂逐狄人，具邢器用而遷之，師無私焉。夏，邢遷于夷儀。諸侯城之，救患也。凡侯伯，救患，分災，討罪，礼也。

とある。先の記事を受けているのであろう。『国語』齊語に「狄人攻邢，邢君出，致於齊，桓公築夷儀以封之，男女不淫，牛馬選具。」とあり、『管子』大匡篇に「狄人伐邢，邢君出，致於齊，桓公築夷儀以封之，予車百乘，卒千人。」とある。また、つぎの僖公二年の経に

二年春王正月，城楚丘。

とあり、伝には

二年春，諸侯城楚丘而封衛焉。不書所会，後也。

とある。

いずれにしても，以上のことはこの時期狄人の激しい攻撃によって，そのルートに当たる邢国，衛国は一時滅亡し，斉桓らの諸侯の助けによって遷したことを云っている。また，僖公十年の経には「狄滅温，温子奔衛。」，伝に「狄滅温，蘇子無信也。蘇子叛王即狄，又不能於狄，狄人伐之，王不救，故滅。蘇子奔衛。」とあり，隠公三年の左伝注に狄の滅した温の地を「周王畿内之小国，當在今河南省温縣稍南三十里之地。」<sup>J(35)</sup>とある。狄に与した温のように，黄河流域の中原の国々はその政治的争いに，王もその臣も含めて，北方から南下侵入する狄人を利用してもいた。また僖公十二年の伝に

春，諸侯城衛楚丘之郭。懼狄難也。

とあって，狄の難を恐れて諸侯が衛の外城を築いたことを云う。つぎの，僖公十三年の経に

十有三年，春，狄侵衛。

とある。更に，僖公十六年の伝に「秋，狄侵晋」とあり，僖公十八年の経には

狄救齊。……冬，邢人・狄人伐衛。

とあって，狄は更に斉桓死後の斉の四公子の徒による乱にも介入したらしく，会箋に「此必四公子之徒有召狄援者」と解してある。<sup>(36)</sup>また，狄と邢とが衛を伐っている。伝に「邢人・狄人伐衛，圍菟園。衛侯以国譲父兄子弟及朝衆曰，苟能治之，燬請從焉。衆不可。而後師于訾婁。狄師還。」とあるが，邢師の還を云わないところを見ると，狄が衛攻撃の主導権を握っていたのであろう。邢はこの時，狄と行動を共にしている。強圧な狄に抗しきれず，それに従う形になっていたのかもしれない。衛はその報復として，つぎの，僖公十九年の経に

衛人伐邢，

とあり，伝には「秋，邢人伐。以報菟園之役也。……甯莊子曰，昔周饑，克殷而年豐。今邢方無道，諸侯無伯，……」とある。会箋に「蓋憚狄之強不敢伐而独用師於邢也。二十一年狄為邢侵衛。亦不報也。間五年而遂滅邢。」と解しており，<sup>(37)</sup>強力な狄に従う邢は衛に恨まれ，遂に同じ諸夏の同じ姫姓の衛国に滅ぼされることになる。つぎの，僖公二十年の経に

秋，齊人，狄人盟于邢。

とあり，伝に「秋，齊，狄盟于邢，為邢謀衛難也。於是衛方病邢。」とある。狄は邢のために，つぎの，僖公二十一年の経に

二十有一年春，狄侵衛。

とあって，衛を攻めている。また，僖公二十四年の経，伝には周王室が狄の力を借りて鄭を伐ったことなどが記されている。そして，狄が衛を侵した五年後の僖公二十五年の経に

二十五年春王正月，丙午，衛侯燬滅邢。

とあり，伝には「二十五年春，衛人伐邢，……衛侯燬滅邢。……」とあって，同じ諸夏で同姓の衛によって邢は滅ぶことになる。

これらの記事を概観してみると，この「邢姜大宰已毀」の流出時期について，李氏は僖公元年の条にあるように，強盛なる狄の攻撃によって邢国が潰した時で，「儘管“三師無私，但狄人攻入邢地，不免要擄獲一些財物”として，この時の流出を考えている。また，張氏は，この時か，或いはその後にあるように，邢と狄が聯盟した時の饋贈の可能性も考えている。<sup>(38)</sup>はっきりしたことは分らないが，この宗廟の彝器に係る記事として，唯一のものが，この時の僖公元年の伝にある「具邢器用而遷之，師無私焉。……」である。つまり，諸侯は邢国の器物をそろえて移し，「師



無私焉」即ち、かつてに奪うことがなかったと云うことである。この器物には、当然宗廟の靈器も含まれる。左伝注に「諸侯之師於邢之器用財物無所私取。」と解する。<sup>(39)</sup>ここは、斉桓や諸侯の徳を称える説話的部分であろう。先の閔公元年の伝に、「狄人伐邢」とあって、管敬仲の言として「戎狄豺狼、不可厭也」とあった。戎や狄は豺や狼のように貪欲だと云う。それは「私取」することのないと云う、諸夏の諸侯を率いる斉桓らの徳を称える部分に対するもので、後に付け加えられた説話的部分ではないかと思われる。それは斉桓の覇業へと話を導く。事實は、この時狄は邢国における邢姜の大宰已であったその家廟にある靈器らを奪ったのであり、そのことが逆に、このような説話的部分を作り出させる要因になったのではないかと思われる。その器が、北方への流伝の経過はよく分からないが、やがて、中国最北辺の大興安嶺山脈に連なる内蒙古高原の東縁において、今日窖蔵器として出土したのではあるまいか。推測であるが、いずれにしても、これらの時期に流出したものであろうと思われる。

この大宰已鬲の作器時代については、李氏は西周末期、張氏は器形、花紋と銘文から西周晩期から春秋早期として、また「周代、活動在華北地区的游牧民族狄人从大漠南北進入中原，参加各諸侯国的称雄戦争。……狄人雖曾進入中原，但其主要活動区当在大漠南北，因游牧之特点，携至霍林河畔蔵于地下。」と述べている。<sup>(40)</sup>時間的問題や、北方民族間の連携などの問題もあるが、李氏は、その出土地点については、後の東胡の支と云う鮮卑は、山戎、北狄の後裔として、彼らがもと居た古代鮮卑山の場所であったのではないかと述べている。<sup>(41)</sup>なお、銘文選は西周晩期、金文集成は春秋早期の作器としている。<sup>(42)</sup>また、この器と類似した器が、1963年に内蒙古自治区において遼寧省との境の寧城縣から出土している。即ち、西周晩期から春秋早期の夏家店上層文化のものでと云う、やはり同じ内蒙古自治区の東の端の遼寧省との境における、寧城縣南山根の石柳墓101号墓から出土した青銅器の中に、この大宰已鬲ととてもよく似た鬲（図、8）や簋がある。銘文はないが、口径19.5cm、蓋を含めた通高は21.6cmである。その器形、紋様らが、この器と基本的に類似していることは早くから指摘されていた。<sup>(43)</sup>この関係など、この大宰已鬲と同出の簋も含め、北方民族と南方の中原地区との関係や各北方民族の広い連携の問題など、これらについて更に歴史的に調べてみたい



（図、8）

いと思う。また、諸氏はこの器と類似の多くの中原器をあげている。繁雑になるのでここではあげないが、<sup>(44)</sup>中原の洛陽を中心として、その鑄造工房の特定や、その模倣など、類似するそれらの器の分類整理など総合的研究が必要であろう。更にこれらについて調べてみたい。

## おわりに

いわゆる南北を結ぶ通路上に、武王の弟、周初の大政治家・周公の子が封建されたとされる邢国は、北方民族の圧力に抗しきれず、遂には一時滅亡する。邢国の周初における封建は、この北方民族に対する洛陽成周を中心とする、黄河流域における中原地域の藩屏等の意味があったのであろう。北方民族の動きやそのつながりが問題であるが、この大宰已鬲は、これらの時期に流失したものと

思われる。遠く中国における最北辺の草原に北方民族の器と共に出土したこの中原の彝器は、その広いつながりを予測せしめるものであろう。同じ中国内蒙古の東縁南山根より出土した類似の器ら北方地域から出土する中原青銅器を含め、この時期における北方民族の動向について、更に詳しく調べてみたいと思う。

### 付記

私事であるが、私の勤める鳥取大学は砂漠研究が世界的に有名である。そのため、早くから、中国の内蒙古自治区とは交流がある。昨年の夏、友好協力している内蒙古師範大学のある区都の呼和浩特市を訪れた時、通遼へ飛んでこの器を実見したかったが、三日に一度しか飛行機が飛ばず、断念した。その時、向こうの人は、東側の吉林省側から入った方が近いとおっしゃっていた。この出土した場所はそのようなところである。塞外(万里の長城の外)からの邢器らの出土を見ても、北方草原からの視点で北を背にして南方黄河流域の洛陽の方角を見ても、東、西を含めたアジア大陸の広がり、今に至る砂漠アジア世界と湿潤アジア世界とのその古くからの交流を感じざるを得ない。これらのことこそが、この東アジア地域に生命と文化の躍動感を与えてきたのである。

### 注

- (1), 李殿福「殷初紀」社会科学戦線一九八〇年第三期, 二二一頁(同氏『東北考古研究』二, 中州古籍出版社, 一九九九年, に再録)。(図, 1), (図, 2)は張柏忠「霍林河礦区附近発現的西周銅器」内蒙古文物考古一九八二年第二期, 図版貳の写真に依る。
- (2), 張柏忠「霍林河上游出土周代銅器の几点補正」社会科学戦線一九八二年第二期, 一八五頁。注(1)の張氏論文, 五頁。北方民族については, 注(1)の李氏論文, 二二二頁, 佟冬編「二, 西部的山戎」『中国東北史』吉林文史出版社, 一九八七年, 一六五~一六九頁, 孫進己, 馮永謙編「第二節, 山戎と東胡」『東北歴史地理』黒竜江人民出版社, 一九八九年, 一八五~一九一頁, 張碧波, 董国堯「一, 東胡文化」『中国古代北方民族文化史』黒竜江人民出版社, 一九九三年, 九六~九九頁, 林漢「東胡と山戎の考古探索」『環渤海考古国際学術討論会論文集』知識出版社, 一九九五年, 中国青銅器全集編輯委員会編『中国青銅器全集』北方民族, 第一五巻, 文物出版社, 一九九五年, 一~三九頁, 朱永剛「東北青銅文化的發展階段与文化区系」考古学報一九九八年第二期, 藤川繁彦編『中央ユーラシアの考古学』同成社, 一九九九年, 六三~七九頁, 劉国祥「夏家店上層文化青銅器研究」考古学報二〇〇〇年第四期, 国家文物局主編『中国文物地図集』内蒙古自治区分冊(上), 西安地圖出版社, 二〇〇三年, 八二~八三頁, 等参照。
- (3), 注(1)の張氏論文, 五頁。
- (4), 注(1)の張氏論文, 五頁。
- (5), 注(1)の李氏論文, 注(1), 注(2)の張氏論文等。
- (6), 注(1)の李氏論文, 上海博物館商周青銅器銘文選編写組『商周青銅器銘文選』(後, 銘文選と略称)(一), 文物出版社, 一九八六年, 大宰巳簋, 四七八, 三〇四頁, 馬承源主編, 銘文選(三), 文物出版社, 一九八八年, 四七八, 三三四頁, 中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成』(後, 金文集成と略称)(第七冊)中華書局, 一九八七年, 井姜大宰巳, 三八九六, 一一〇頁, 三八九六, 一九頁, 等は大宰巳と釈しているが, 注(2)の張氏論文では, 巳を它と釈して, 它𠩺と呼んでいる, 一八五頁。注(1)の張氏論文に同じ。しかし, 金文の它の字とは, 異なるようである。
- (7), 注(1)の張氏論文, 五頁, 注(2)の張氏論文, 一八五頁, 注(6)の銘文選, (三), 四七八,

- 三三四頁，注（６）の金文集成，三八九六，一九頁，等参照。
- （８），注（１）の李氏論文，二二一頁，注（１）の張氏論文，六頁。寸法の（ ）の中は，両者異なる場合の張氏論文による。
- （９），注（１）の李氏論文，二二一頁，注（１）の張氏論文，六頁，注（６）の銘文選，（一），四七八，三〇四頁，注（６）の金文集成，三八九六，一一〇頁。
- （１０），容庚編，張振林，馬國權纂補『金文編』中華書局，一九八五年，卷五，二九六～三〇一頁。
- （１１），注（６）の金文集成，第六冊，師爽父𡗗，三七〇六，九〇頁，伯嘉父𡗗，三六七九，八七頁，注（６）の金文集成，第七冊，卓林父𡗗（卓林父𡗗蓋），四〇一八，三四頁，魯遼父𡗗（魯大宰遼父𡗗），三九八七，三〇頁，魯伯大父作季姬𡗗（魯伯大父作季姬媯𡗗），三九七四，二九頁。
- （１２），注（１）の張氏論文，五～六頁。青銅器の鑄造とスパーサーの問題については，松丸道雄「西周青銅器製作の背景 - 周金文研究・序章 - 」松丸道雄編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会，一九八〇年，等参照。
- （１３），注（１）の張氏論文，七頁。
- （１４），注（１）の李氏論文，注（１），（２）の張氏論文，注（６）の銘文選，（三），四七八，三三四頁，等と同じ。
- （１５），注（１）の張氏論文，六頁。
- （１６），注（６）の銘文選，（三），四七八，三三四頁，
- （１７），蔡𡗗は，注（６）の銘文選，（一），三八五，二二三頁，銘文選，（三），三八五，二六三～二六四頁，注（６）の金文集成，第八冊，四三四〇A，三〇一頁。宰と家については，豊田久「西周金文に見える「家」について - 婦人の婚姻そして祖先神，領地や軍事など - 」「論集 中国古代の文字と文化』汲古書院，一九九九年，松井嘉徳「第一章，「王家」と宰」『周代国制の研究』汲古書院，二〇〇二年，等参照。
- （１８），注（２）の張氏論文，一八五～一八六頁，注（１）の張氏論文，六～七頁。
- （１９），張亞初編『殷周金文集成引得』中華書局，二〇〇一年，六四四頁，注（６）の金文集成，第八冊，仲冉父𡗗，四一八八，四一八九，九頁。
- （２０），李学勤「論仲冉父簋与申国」中原文物，一九八四年，第四期，三一頁，崔氏「南陽市北郊出土一批申国青銅器」中原文物，一九八四年，第四期，一六頁。
- （２１），楊柏峻編『春秋左伝注』第一冊，中華書局，一九八一年，隱公四年の条。
- （２２），竹添光鴻『左氏会箋』（後，会箋と略称）（漢文大系），富山房，一九一一年（新文豊出版公司本），僖公二十四年，隱公五年の条，劉文淇『春秋左氏伝旧注疏証』二冊，香港太平書局，一九六六年，僖公二十四年の条。
- （２３），注（２１）に同じ，郭氏『兩周金文辞大系考釈』文求堂書店，一九三五年，周公𡗗の条，三九〇，ウ。陳夢家「西周銅器断代」（三），考古學報 第九冊，井侯𡗗の条，一九五七年，七四頁，陳槃『春秋大事表列国爵姓及存滅表譌異（三訂本）』（壹），中央研究院歷史語言研究所，專刊之五十二，一九六九年，邢の条。臣諫𡗗は注（６）の金文集成，第八冊，四二三七，一六〇頁，河北省文物管理处「河北元氏縣西張村的西周遺址和墓葬」考古一九七九年第一期，李学勤，唐雲明「元氏銅器与西周的邢国」考古一九七九年第一期，等参照。
- （２４），麦方尊（麦尊に同じ）は注（６）の金文集成，第十一冊，六〇一五，一九六頁，井侯方彝（麦彝に同じ）は注（６）の金文集成，第十六冊，九八九三，一，二，七頁，麦盃は注（６）の金文集成，第十五冊，九四五一，一二八頁，麦方鼎は注（６）の金文集成，第五冊，二七〇六，一一一頁。乾隆帝勅撰『西清古鑑』一九五一年成，邢侯尊，卷八，三十三ウ～三十四ウ，邢侯方彝，卷十三，十オ～十一オ，邢侯盃，卷三十一，三十ウ～三十一ウ。

- (25), 松丸道雄「西周青銅器中の諸侯製作器について - 周金文研究・序章その二 - 」松丸道雄編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会, 一九八〇年, 一四〇~一八四頁。
- (26), 宜侯矢鬲は注(6)の金文集成, 第八冊, 四三二〇, 二七六頁。白川静『金文集釈(白鶴美術館誌)』第一〇輯, 白鶴美術館刊, 五二, 宜侯矢鬲の条, 一九六五年, 五三九~五四〇頁, 等参照。
- (27), 注(23)の郭氏に同じ, 麦尊の条, 四〇ウ。
- (28), 注(6)の金文集成, 第八冊, 四二四一, 一六六頁、注(23)の郭氏に同じ、周公鬲の条、三九オ、ウ, 注(23)の陳夢家に同じ, 井侯鬲の条, 一九五七年, 七四頁。
- (29), 注(28)に同じ, 注(23)の陳槃に同じ, 注(23)の河北省文物管理处論文, 李氏, 唐氏論文に同じ, 等参照。なお, 中国文物報の一九九四年九月一八日「邢台輪胎廠建工程考古喜獲成果」, 十一月十三日「邢台西周邢国調査有重大發現」には, 邢台市における, 西周, 春秋早期の邢国墓の出土が報告されている。中国青銅器全集編輯委員会編「衛国, 邢国及其附近地区的青銅器」『中国青銅器全集』六, 西周二, 文物出版社, 一九九七年, 四~八頁, 等参照。
- (30), 注(25)に同じ, 一七一頁。
- (31), 注(1)の李氏論文, 二二二頁, 注(2)の張氏論文, 一八六頁。
- (32), 注(22)の会箋に同じ, 莊公三十二年の条, 注(21)に同じ, 莊公三十二年の条。
- (33), 注(21)に同じ, 閔公元年の条, 注(22)の会箋に同じ, 閔公元年の条。
- (34), 注(21)に同じ, 閔公二年の条。
- (35), 注(21)に同じ, 隱公三年の条。
- (36), 注(22)の会箋に同じ, 僖公十八年の条。
- (37), 注(22)の会箋に同じ, 僖公十九年の条。春秋年表に関しては, 平勢隆郎編著『新編, 史記東周年表』東京大学出版会, 一九九五年, 等参照。
- (38), 注(1)の李氏論文に同じ, 二二二頁, 注(2)の張氏論文, 一八六頁, 注(1)の張氏論文, 七頁。
- (39), 注(21)に同じ, 僖公元年の条。
- (40), 注(1)の李氏論文, 二二二頁, 注(2)の張氏論文, 一八五頁, 注(1)の張氏論文, 七頁。
- (41), 注(1)の李氏論文, 二二二頁。
- (42), 注(6)の銘文選, (一), 四七八, 三〇四頁, 銘文選, (三), 四七八, 三三四頁, 注(6)の金文集成, 三八九六, 一九頁。
- (43), 遼寧省昭烏達盟文物工作站, 中国科学院考古研究所東北工作隊「寧城縣南山根的石柳墓」考古学報一九七三年第二期, 二九頁, 年代は三八頁, (図, 8)は, 「寧城縣南山根的石柳墓」の寧城南山根石柳墓出土銅器, 図版貳に依る。中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「寧城南山根遺址発掘報告」考古学報一九七五年第一期, 等参照。注(1)の張氏論文, 七頁。
- (44), また, 「井」に似た「井」関係の諸器も多くあり, 両者の関係も含めて, 総合的に調べてみたいと思う。また, 殷金文の尹光鼎(乙亥乍父丁鼎)銘(王辰『続殷金文存』上二五ウ, 乙亥乍父丁鼎, など)に「王が井方を征す」とあり, これらについても調べてみたい。于省吾編『甲骨文字詁林』(第四冊), 井の条, 二六五七~二八五八頁, 金岳「天薨氏族井方井邦歴史文化研究」(四)一論井方, 井伯非邢国邢侯」『北方民族方国歴史研究』中州古籍出版社, 一九九四年, 等参照。この通路上の内蒙古自治区昭盟翁牛特旗からは, 図象銘などをもった殷の青銅器らも出土している。後考に俟ちたい。

(2006年1月10日受付, 2006年2月8日受理)